

「セントメリーのリボン」

稲見 一良^{いっちら}著

書店でふと手にした本が予想以上に面白く、夢中になってしまい、著者の作品を次々に読んでいった。稲見一良の小説とは、そんな忘れられない出会い方をしました。きっかけとなったのは、「ダブル・オー・バック」という小説でした。何度も読み返した事を覚えていきます。そのほか、稲見作品はどれも面白いのですが、この「セントメリーのリボン」は特別で、今までに読んだ小説の中で最も好きな作品の一つです。

稲見一良が描く世界に共通して登場するのは、孤独を選んで生きてゆく人々です。自身であり続けるために世間と距離をおいて生きる人達。本作品では、猟犬専門の探偵という、実際にあるのかどうか想像もつかない職業の男性が登場します。その探偵が専門外にも関わらず、失踪した盲導犬を捜索することになります。捜査の過程で出会う人々。彼らの清潔に生きようとする姿勢。先に生きる者が若い世代に託す希望。心が温かくなつて、何度読んでも泣いてしまいます。

稲見一良の作品はハードボイルド小説と呼ばれています。しかし、登場する男性や女性は、皆、心に深い闇や、大きな空洞を抱え、その空虚から逃げる事をせず、かといって踏み越える強さもなく、自らの弱さを携えたまま、自分を生きてゆきます。そんな弱い自分を知って生きる人々の静かなたたずまいに、稲見作品独特の魅力を感じます。作家としての活動期間が短く、作品数が少ないのが残念でなりません。

M
T



光文社文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッシュョンビジネス・御堂筋新聞